
ONE PIECE-自由の海賊-

ハリスダレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE - 自由の海賊 -

【Nコード】

N8034V

【作者名】

ハリスダレ

【あらすじ】

ゴミ山“不確かな物の終着駅”に住む二人の青年。そこから始まる八口の旅。

一話 二人

東の海のある国には一面がゴミで埋め尽くされた「ゴミ山」なるものがある。

そのゴミ山にはある少年がいる。

「おいギャラブ、今日はどうだった？」

ゴミ山に建てられたトタン屋根の家に帰ってきたギャラブに、期待のような気持ちを込めてハロは話しかけた。

「全然ダメだ」

そう言うギャラブは小袋をハロの腰かける机に投げ捨てた。

机にぶつかった衝撃で小袋の紐がほどけ、中の金が散らばった。

「これっぽちかよ！」

「ブルージャムのとこの手下のやつを2人おそった」

硬貨が10枚、紙幣が4枚ほどだ。

2人からすれば端金にすぎない。

だが2人にとって大事なことは金じゃなくてブルージャム海賊団だ。

ハロとギャラブ。この2人をゴミ山で知らないものはいないだろう。まだ10代と見られる2人組。青色の髪が印象的なハロ、つり上がった目、筋肉の盛り上がった逞しい体のギャラブ。

2人は主にゴミ山に根城を置く、ブルージャム海賊団を獲物にしている。

「ブルージャムを狙いはじめて明日でちょうど6年か」
そう呟いたハロは静かに壁にかけられている写真を見つめた。そして同じようにギャラブも。
写真の中にいるのは1人の女性。その女性の手の先には2人の子どもの手がある。

ブルージャムがゴミ山に来たのは6年前。

元々はグランドラインで海賊をしていたブルージャムは平穏を求めゴミ山に身を隠した。

そして貴族を買い、自分達のことを海軍に漏らさないこと、ゴミ山での犯罪を見逃すことを約束させた。

ブルージャムが来たことによりゴミ山の住人達の生活は一変した。
少しでもブルージャムの気にさわることをすれば女、子ども関係なく殺す。

そして写真の女性もまたブルージャムに反抗し命を落とした。

「カナギさんはゴミ山に捨てられた俺たちを1人で育ててくれた」
「ああ、だから絶対に仇をとる」

カナギの仇をとるためハロとギャラブは力をつけた。体を鍛えぬき、

武器の使い方を体に教え込んだ。

2人がそれぞれの思いを胸に刻む。

その静かな重い空気を突然吹き飛ばしたのはドアが吹き飛ぶ音だ。
バアアーン！とボロいドアは吹き飛びながら空中分解し床に散らばった。

2人は同時に振り向いた。そして電流が走った。

ブルージャムの一味だ。手下ばかりだが、先頭にはポルシェーミがいる。

「この家にうちの金に手を出したバカがいるよな？しかも1回じゃねえ、何百回とな」

ポルシェーミは冷静な口調で話しかけているが、胸に押し殺してある怒りは容易に察することができた。

「2人組のガキがうちのやつを襲っているって話は何年も前から聞いてたが、そのガキの居場所をずっと見つけれなかった。窮屈な暮らしは今日で終わりにしてやる。感謝しろよガキども！」

ハ口とギャラブは固まったまま動かない。だが怯えているわけではない。

相手はざっと見て20人はい、絶対に逃がさないため家の回りにもいると見ていいはずだ。

まともに戦って勝てるはずはない。

最低限の戦闘でここから逃げる

それが1番助かる可能性が高い。2人は覚悟を決めた。

「お前らに何時間もかけてられねえんだ、さつさとやつちまえ!!」
ポルシェーミの命令と同時に家の中に海賊がなだれ込んだ。

それと同時にハ口は壁にたてていた刀を抜き、ギャラブは腰の2丁拳銃をかまえた。

2人は裏口から逃げるのを選んだ。正面から逃げるにはポルシェーミと闘わなければならない可能性が高い。
なら多少、後ろからの攻撃を耐えて逃げる方がましだ。

後ろからの弾丸が2人をおそった。

叫びたいほどの激痛、だが今は我慢しかない。

裏口の扉を開けると思った通りかなりの数の海賊がかまえていた。
だが海賊達はハ口とギャラブに斬られ、撃たれ、押されている。
既に戦闘体勢に入っているハ口とギャラブと入っていない海賊達ではたとえ力の差があろうと勝敗は決まっている。

道を塞ぐ海賊を倒し、ハ口とギャラブは全速力で逃げた。

ゴミ山の中で逃げるのに必要とされるのは早さだけではない。障害物の多いゴミ山の地図を正確に頭の中で作ることが重要なのだ。
だが毎日のように捨てられるゴミで、昨日通れた場所が通れなくなるなんてざらにある。

いかにゴミ山を見ているか、それで決まる。

もちろん勝つのは今までゴミ山で育ち、そこでブルージャムの一味と戦ってきたハ口とギャラブだ。

「もうまいたか？」

ギャラブはハ口にといかけた。

「もう海賊達は見えない、いいんじゃないか」

海賊達から逃げ切った2人は木のしたに腰を下ろした。

お互いに平然を装っているが、2人の背中には撃たれた傷がある。

「どこかで傷の治療しないとヤバイよな」「ああ、とはいっても金も無いし、夜はゴミ狩り部隊もいる」

ハ口とギャラブがもし町にはいるなら、ゴミ山の住人を狩る者、
“ゴミ狩り部隊”に命を狙われる。

「もうフーシャ村に下りるしか道はないか」

「それしかな………がはっ！」

銃声が夜の静かな空気を斬った。

ギャラブの言葉は途中で途切れ血を吐き地面に倒れた。

「ギャラブ！……！おいギャラブ！……！」

叫んでいるハ口を黙らせるほどの衝撃。

「ポルシェーミの野郎仕留め損ねやがって、2人組で片方は青色の髪。よお、お前らだろ？うちの金に手を出したのは」

目の前にいるのはギャラブを撃ったおとこ、そして2人が復讐を誓った男。

ブルージャムだ。

一話 二人（後書き）

感想なんかあったらください、お願いします。

二話 一人

「ブルージャム……!!」

今、確かに目の前にブルージャムがいる。

「ハッハッ！お前らなかなか運が悪いな。」
笑うブルージャム

「うあああああああああああ……!!!!!!!!ブルー
ジャムウウウウウウ!!!!!!!!」

「どうしたクソガキ？イカれちまったか？」

そう言うブルージャムにハ口は斬りかかった。

ブルージャムは左手に刀を、右手にピストルをかまえる。怒りのま
まに刀を振り続けるハ口の攻撃は容易く読まれた。

冷静さを失ったハ口のわき腹に弾丸が撃ち込まれた。

「ぐあああ……!!」

ハ口は傷口を押さえ後ろへ後退した。

痛みがハ口に少しだけ冷静さを取り戻させた。

「ハアハア、ブルージャム何でデメエがこんなところにいやがる？」
船長であるブルージャムがわざわざ盗人2人のために来ることなん
てあり得ない。

「なあに、今日は食い過ぎてな食後の運動がしたかった。それだけ

だ」

この発言はハ口の怒りを絶頂まで引き上げた。

「食後の運動がしたかっただろ？そんなことのためにギャラブは、ギャラブは」

ハ口はもう戦える体ではない。血だらけだ。

だがハ口にとってはもうそんなことはどうでもいい。目の前の男一人を殺せば自分が死んでも。

「やめ……ろ……ハ口！」

力の限り振り絞ったであろう、小さな声はハ口を正気に戻した。

「ギャラブ！？」

ゆっくりとギャラブは立ち上がった。

尋常ではない出血でありながらギャラブは立ち上がった。

「まだ立てたとはな、急所を狙ったんだが」

「いいか…ハ口、俺が時間……を…稼ぐ。お前は逃げる！」
「ふざけんな！お前をおいていけ…」

2人の話が終わらないうちにブルージャンが斬りかかった。
「どっちも逃げられやしねえよ、諦めろ」

ハ口とギャラブ対ブルージャン。勝敗は全員分かっている。
もともと闘うなど不可能なほどの傷があるハ口とギャラブ。このまま闘えば2人とも死ぬ。

だからこそ瀕死のギャラブはせめてハ口にだけでも生きてほしい。

ブルージャンの刀を受けるハ口はまともに刀を振るえていない。

「逃げろおお！！ハローー！」

ギャラブは全身全霊の力を込めて引き金を引いた。

「生きて、生きて、生きて、俺の分も生きてくれええ！頼む！！」

ギャラブの魂の叫び、ハ口は心を決めた。

ブルージャンの右腕と腰に弾は命中した。

そしてそのすきにハ口は走り出した、だがまともには走れず木や石にぶつかりながら。それでもハ口は走った。

ギャラブの思いを無駄にはしない。

「ちくしょうが、このクソガキが！！」

ブルージャンは痛みでハ口を追うことはできなかった。

「1人は逃がしたが、テメエは逃がさ……！！」

ブルージャンがギャラブに近づいたとき、もうその時、ギャラブは生き耐えていた。

だがその表情は一切の曇りはなくただ笑っている。

三話 海賊

フーシャ村と不確かな物の終着駅>グレイターミナル<に挟まれているコルボ山。ハ口はあれから数時間ひたすら山を進んでいる。コルボ山にはワニの住む川もあれば虎がいたり崖があつたりと危険がとにかく多い。

ハ口もすでに2回崖から落ちそうになった。

(どれぐらい進んだんだ？早く山を下らないとヤバイ)

ハ口はもう満身創痍、限界に達していた。

だが倒れるわけにはいかない、ギャラブとの約束を守るため。

そして夜が明けた頃、ついに山を抜けた。

「ハアハア、やつ…と、着いた…ハアハア、」

まだ人は歩いていない、ハ口はもう体が動かなかった。やつとフーシャ村にたどり着いたことによる安心で意識も遠のき始めた。

その場に倒れ込むハ口。ピクリとも動かない。

だが天はまだハ口を見捨てていなかった。

「まあ！この子ヒドイ傷！？早くお医者さんに！」

ハ口を見つけてくれた1人の女性。フーシャ村、酒場の店主マキノだ。

「なあマキノ、こいつまだ起きないのかな？」

「ダメよルフィ、イタズラしちゃ！」

（誰だうるさいな、もう少し静かに寝させてくれ……えっ！！）

ハロはゆつくりとまぶたを開いた。そこから見えるの木目の天井。

「生きてる……！！」

「あら、目が覚めた？よかった助かって」ハロの目の前には優しそうな女性がいることに驚いた。もしかしてこれは死後の世界なのかと、それほどまでにハロにとってマキノは天使のように輝いて見えた。

「あ…あの、ここはどこですか？フーシャ村ですか？」

「ええそうよ。それとここは私の店だから気にせずゆっくりしてね。それにしてもどおしてあんなところで怪我して倒れてたの？」

マキノの質問にハロは口を濁らせた。

自分がゴミ山の者で、海賊に命を狙われてるなどと言えば海賊に彼女が自分を追い出すとハロは思った。

口を濁しているハロにマキノはこれ以上聞こうとしなかった。

「私はこの町で酒場を経営してるマキノっていうの、あなたは？」

「俺はハ口って言います。マキノさん本当にありがとございました」

「私にお礼なんていいわよ、それより今日は村のお医者さんが隣の村までいってね、ある人達に治療してもらったの」

マキノは何かを隠すような口ぶりであった。

「ある人達って誰ですか？」

「シャンクス達だよ！！！！」

いきなり割って入ってきたのは1人の少年だ。

「こらルフィ、あなたは黙ってなさい！」

「なんでだよ！？なあハ口、シャンクスはスゲー海賊なんだぜ！」

このルフィの言葉にハ口は凍りついた。

自分は海賊に助けられた？

「お願い勘違いしないで、シャンクスさん達は悪い人じゃないの……」
マキノの言葉は今のハ口には入ってこなかった。

「すいません、1人にしてくれませんか？」

「わかったわ。何かあったら表の酒場にいるから呼んでね。ルフィ行くわよ」

そうしてマキノはルフィをつれて部屋から出ていった。

ハロはブルージャム以外の海賊を見たことがない。ハロにとっての海賊はただの悪人。

その海賊に命を助けられたのはハロにはおかしな気分なのだ。

その頃港にシャンクスたちが帰ってきた。

シャンクスたちが向かうのはマキノの酒場だ。そこはシャンクスたちにとってフーシャ村での憩いの場所だ。

きょうの航海は途中で引き上げることになった。シャンクスは朝、治療した子供のことが気になったのだ。

「なあベン、あの朝の子ども大丈夫かな？」

「こりゃあ、お頭が心配事とは珍しい。まあ大丈夫だと思いますぜ、傷は塞いだんですし」

そう言うベン・ベックマンにも気になってることがあった。

（あの子どもの来ていた服、体から臭ってきたのは生臭いような、不燃物の臭いのような、表現できない臭い。しかも最近ついた様なものじゃない、考えられるのはグレイターミナルの住民か……しかしあの争った傷跡も何かありそうだな）

そうしてシャンクスたちは酒場に到着した。

「やあ、マキノさん！あの子どもが気になって早めに帰ってきたんだが、どうになりました？」

シャンクスの陽気な声とは裏腹にマキノの顔は曇っている。

「それが自分を治療したのが海賊だと知ると急に……」

「そうか…まあ、当たり前だよな！ハッハッハッハッ」

シャンクスが笑いだすと、他のクルーたちも笑いだした。

「ダッハッハッハッ！まったくだなお頭！！！」

「まっ俺たちに助けられて気分がいいわけねえよな！」

「そりゃそうだ、ハハハハハハ！！！」

「マキノさん、俺に会わせてくれないか？」
シャンクスは笑いながらこう言った。

四話 変化

ガチャ……

ノックをすることもなくシャンクスはハロがいる部屋にはいった。
麦わら帽子をかぶったなんともものんきそうな男。

「なっ！？誰だあんた？」

「ん？俺はシャンクスだ！」

シャンクスの名前を聞いたハロは眉間にシワを寄せた。

「海賊かよ、あんた！」

明らかな敵意をむき出しにして言った。

「おい、お前ら2人で話をさせてくれ」

シャンクスは後ろにいる仲間にそう言っているとドアを閉めた。
そしてハロのベッドの横に椅子を置き座った。

「いやゝ思ったより元気そうでよかった。船医は大丈夫っていつて
たんだが自分の目で見たくてよ。あっそうそう、さっきの質問だが
… Yesだ。俺は赤髪海賊団で頭をやっている」

「なんで海賊のあんたが俺を助けたんだ？」

「んゝ、そりゃ死にそうなやつを放っとくなんてできねえだろ。そ

れにいつも世話になってるマキノさんの頼みだからな！」

シャンクスの笑いながら話すその様子にハ口は違和感を感じずには
いられなかった。

「あんた本当に海賊なのか？」

目の前にいる海賊は少なくともブルージャムなんかとは違う。

「だからいつてるだろう、俺は赤髪海賊団の船長だつて！」

ハ口は何か覚悟を決めたようにシャンクスに問いかけた。

「1つ聞かせてくれ、あんたは人を殺したことがあるのか？」

ハ口の質問を聞くとシャンクスは少しうつみきながら答えた。

「ないと言えば嘘になる。同じ海賊や海軍と戦って殺したこともある。だがなハ口、俺たちは決してそんなことのために海軍をしているわけじゃない。」

「じゃあ、あんたはなんで海賊なんかしてるんだよ？」

「俺はさ、自分の目で世界を見てみたかつたんだよ」

「世界を？」

ハ口は思い返してみた。自分がいた世界を。

力と金でゴミ山の住人をねじ伏せた海賊、自分以外の人間をゴミと
しか思わない貴族。そんなやつらばかりだと思ってた。

だがマキノさんは違った、ハ口を助けてくれた。海賊もそうじゃな

いのか。

（俺はまだまだ世界を知らないんじゃないのか？）

「なあシャンクス冒険は楽しいのか？」

「ハッハッハッハッ！そんなの当たり前だろ！」

「そうか…」

ハロは海賊が冒険を楽しむやつだなんて思ったことはなかった。

（シャンクスか…少し一緒に話してみるのもいいかもしれないな）

ハロの心に少しの変化がおきた。

五話 決意

ハロがフーシャ村に来てから2週間がたった。

ようやくまともに動き回れるようになり、フーシャ村での生活にも慣れてきた。

現在はマキノのところに居候状態である。シャンクス達とも仲良くしている。

そんなハロにはどうしても確認しなければならないことがある。

ギャラブのその後である。

もしかしたら生きているかもしれない。

微かな希望にハロは願った。

「それじゃ気を付けてね、夕御飯までには帰るのよ!」

「わかつてる!」

用事があるというハロをマキノさんは優しく見送った。

その後ハロはコルボ山を登りゴミ山に到着した。

ゴミ山にはブルージャムの部下が徘徊している。目的は恐らくハロを探すため。

ブルージャムの部下はコルボ山の中でも見た。

フーシャ村には来ていなかったのでハロはゴミ山とコルボ山辺りで

探しているのだと予想した。

「お前もしかして八口か!？」

八口が振り返るとそこにはかつてのゴミ山の知り合いである男がいた。

「おおー、久しぶりだな!」

結構な大声で返事をする八口に男は慌て、腕をつかみ、ゴミでできた家に連れ込んだ。

「バカヤロウ! あんな大声で返事をすんな!! わかってるだろ、ブルージャムの一味がお前を探してるの。」

「ああわかってるよ、それより聞きたいことがあるんだ。ギャラブがどうなったか知ってるか？」

八口の質問に男は顔を曇らせながらも答えた。

「ギャラブは死んだよ。」

その一言を聞いた八口は一瞬悲しみの表情を浮かべながらも納得したようにうなづいた。

「そうか、やつぱりな。それでギャラブの遺体は？」

「あのあとゴミ山のやつらと協力してブルージャムに気づかれないようにギャラブを運んだんだ。それでコルボ山に墓をつくって埋めた。」

男の言葉を聞き終わると八口は立ち上がった。

「ありがとな、それじゃもういくよ」

ハ口は墓の場所を聞き、ゴミ山をあとにした。

コルボ山で花を積み、ギャラブの墓に供えた。

「久しぶりだな、悪いな遅くなって。ゆっくり休んでくれ」

ほかにもたわいない話をギャラブに話しかけ、ハ口はコルボ山を去った。

ハ口がフーシャ村に戻ってきたのは日が暮れてからだった。

「ただいまマキノさん！」

「あら、お帰りなさい……あら」

帰ってきたハ口を見たマキノは朝とは違うなにかを感じた。

「フフ、なにかいいことでもあったの？」「まあ、ちょっとね」

ハ口は酒場にいるシャンクスに歩み寄った。

「なあシャンクス！話があるんだ」

「ん？どうした？」

「俺に修行をつけてくれ、お願いします！」

ハ口の突然の発言に酒場にいるみんなが驚いた。

「おいおい、いったいどうしたんだ？」

「俺にはやらなきゃいけないことがあるんだ！そのためには力がい

る」

シャンクスは数分悩む続けると、口を開いた。

「詳しいことは聞くきもないが、1つ約束してくれ、お前が正しいと思うことに力を使うんだ」

「ああ」

（もうあんな思いはしたくない、だれかを守る力がほしい）

「ズルいぞ〜ハ口だけ！俺にも修行してくれよ」

シリアスな雰囲気壊したのはルフィだ。

「ダッハッハッハッハッ、お前みたいなガキにだれが修行してやるか〜！」

それをいつものように返すシャンクス。

酒場には笑いがおきた。

「このケチシャンクス〜！」

修行は翌日から始まった。

シャンクス達が航海に行っているときはひたすら基礎鍛練をする。もともとゴミ山でも修行をしていたがそれとは比べ物にならないほどシャンクスの出すメニューは厳しい。

「2万8千564……2万8千565……」

腹筋、腕立て、スクワット、ランニング、剣の素振り……etc. コルボ山の虎を狩ってくるなんてメニューもある。

そしてシャンクスが帰ってくればシャンクス直々に指導を受ける。だが端から見たらただのいじめにしか見えない。ハロがひたすら吹っ飛ばされる。

「痛って〜！もう少し優しく頼むよシャンクス」

「ダッハッハッハッハッ、もう充分過ぎるほど手加減してるよ、すこし休憩するか」

二人は酒場の店先に腰を下ろした。

「だぁー、疲れたー！ー！」

「お前は独学の修行ばかりで基礎が全くというほどできてない、まずそこからやっていかないと」

「おいこら！そこの2人邪魔だ、どけ！」

シャンクスとハロにそう言ったのは山賊だった。

「殺されなくなかったらさっさとどけ！俺は山賊ヒグマだぞ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8034v/>

ONE PIECE-自由の海賊-

2011年11月15日09時31分発行